

重要文化的景観の選定

《重要文化的景観の新選定》 3件

1 ^{もがみがわじょうりゅういき}最上川上流域における^{ながい まちばけいかん}長井の町場景観【山形県長井市】

山形県南西部の最上川上流左岸の朝日連峰支脈である葉山連山と最上川上流右岸の出羽丘陵の一部に囲まれた長井盆地の中心に位置する長井の町場は、中世以前からの門前町及び宿場町などの性格が複合した2つの^{ざいごうまち}在郷町である宮村と小出村を起源とする。新潟や庄内・出羽三山方面へ向かう旧街道が交差する交通の要衝であり、それぞれの村では宮村館や白山館が政治的拠点となり、商いの中心となる宮の十日町、小出のあら町が物資の集散地として長井の町場の発展を牽引した。特に、最上川舟運期には、宮村に米沢藩の船着場、小出村には商人衆による船着場が設置され、^{あおそぐら}公的な^{じょうまいぐら}青苧蔵や上米蔵が置かれて、置賜地方西部の物資の集散地・商業地として流通・往来の中心となった。江戸時代後期に描かれた絵図には、館跡の周辺に役人が居住し、町人が現在のあら町や本町などの通り沿いに居住する様子が描かれており、在郷町としての役割を果たしつつ商人の町としても発展したことが窺える。現在も本町、大町、高野町、十日町、あら町などでは、商人が居住した通り沿いに間口が狭く奥行き深い短冊状の地割りが並び、その中を水路が流れ、店・住宅・蔵と続く敷地利用を確認することができる。このように最上川西岸の街道に沿って商家群などが点在する長井の町場景観は、江戸時代の最上川舟運に由来する文化的景観として重要である。

2 ^{かつしかしばまた}葛飾柴又の^{ぶんかてきけいかん}文化的景観【東京都葛飾区】

柴又地域は東京都葛飾区の東端、江戸川右岸に位置する。柴又地域には古代から人々が生活し、水陸交通の結節点・中継地点であった。近世初期に現在の地に開かれた帝釈天題経寺は、18世紀後半の板本尊の発見を機に江戸からの参拝客が急増した。近代以降も、鉄道網の整備により門前はますます多くの人々でにぎわい、昭和の初期には参道沿いにまとまりのある景観が形成された。また、19世紀には柴又用水が開削され、20世紀前半には金町浄水場が開設された。

葛飾柴又の文化的景観は、古代から続く人々の生活や往来を全体の基底としながら、近世初期に開基された帝釈天題経寺と近代以降に発展したその門前の景観を中心に、それらの基盤となった農村の様子を伝える旧家や寺社などの景観がその周囲を包み、さらにその外側に、19世紀以降の都市近郊の産業基盤や社会基盤の整備の歴史を伝える景観が広がっている。また、水路の痕跡や道などもよく残っている。以上のように、葛飾柴又は、地域の人々の生活、歴史、風土などによって形成され、それらを現在に伝える重要な景観地である。

3 ^{ちづ}^{りんぎょうけい} 智頭の林業景観【鳥取県八頭郡智頭町】

中国山地を背景とした山間地において、江戸時代から続く人工林とその森林に囲まれた山村集落、旧街道から成る林業景観である。樹齢約350年と伝わる慶長スギと名付けられた大木が現在も残っている。江戸時代に山林の減少が原因とされる大洪水や飢饉などの被害が相次いだため、鳥取藩の管理のもと災害対策と産業振興としてスギの植林が盛んに進められた。智頭の林業にとって最も重要であったのが、積雪地帯であるこの地に生息していた天然スギを利用して明治期において育苗技術が確立されたことであった。この技術確立により、明治期に植林された100年を超えるスギ人工林が豊富に残っており、その後の大正時代から戦後の造林期の植林も多い。また、林業を生業として暮らしてきた^{あしづ}芦津集落は茅葺民家や土蔵などが多く現存し、集落を取り囲む森林は、林業集落ならではの景観を形成し、森林資源で財を得た^{いしたにけ}石谷家住宅を中心とした宿場町も当時から現在に至る往来の面影を残す歴史的景観を形成している。さらに木材の運搬手段とした千代川、森林鉄道、旧街道も往時の生業の姿を垣間見ることができる。このように林業という中心的産業を通じて、森林・山村集落・宿場町・流通往来景観など多様性に富んだ景観が形成され、我が国における中山間地における造林の典型的な林業景観として重要である。

《重要文化的景観の追加選定》 1件

1 ^{ながさきしそとめ}^{いしづみしゅうらくけい} 長崎市外海の石積集落景観【長崎県長崎市】

長崎市北西部に位置する^{にしそぎ}西彼杵半島では、平地が少ないため、急斜面の水はけが良い土地を石積み構造物などで開拓して甘藷栽培を生業とする集落が継承されてきた。その中でも外海は中世後期にキリスト教が伝わり、その歴史文化が色濃く残る地域である。今回、既選定の地区北西側に隣接する^{あかくび}「赤首・大野地区」を追加選定する。